大分県立歴史博物館調査報告第２集

六郷山寺院遺構確認調査報告書Ⅶ

吉祥寺・貴福寺・真覚寺・瑠璃光寺・妙覚寺・多福院光明寺・間戸寺・寶雲坊

1999

大分県立歴史博物館

六郷山寺院遺構確認調査報告書Ⅶ

吉祥寺・貴福寺・真覚寺・瑠璃光寺・妙覚寺・多福院光明寺・間戸寺・寶壽坊

1999

大分県立歴史博物館

序　　文

大分県の西北部を占める国東半島一帯には、古代から中世にかけて「六郷山」と総称される天台宗寺院が存在していました。これらの中には早くから廃寺になったものや無住になったもの、その位置もわからなくなってしまった寺院も多く、関連する諸資料や言い伝えなどによってもなお、その成立や実態などについて不明の部分が残っています。

近年、加速する村々の過疎化により、地元住民が激減しており、幾多の伝承も途絶えつつあります。また農地や農村それ自体の改良事業をはじめとする、さまざまな開発も進行しており、六郷山寺院文化およびこれに関係する地域文化を記録し保存することが急務となっています。

そのため当館では、平成4年度から9年度の6カ年にわたって六郷山寺院の遺構確認調査を行ってきました。しかしながら、調査対象の寺院をすべて網羅するにいたらず、平成10年度から新たに3カ年継続して六郷山寺院の基礎調査を行うこととなりました。今年度は、その初年度に当たるわけです。

今年度以降調査対象とする六郷山寺院は、その場所を探すことさえ難しいものが多く、関連する情報もますます少なくなっていますが、郷土の豊かな歴史を次の世代に正しく継承すべく、調査事業の実施に努める所存であります。本調査の主旨を御理解いただき、御協力を賜りました各寺院関係者および地元の方々、さらに地元教育委員会の皆様方に心から感謝し御礼を申しあげます。

平成11年3月31日

大分県立歴史博物館
館長　首藤安男

例　　言

1．本書は大分県立歴史博物館が実施した六郷山寺院遺構確認調査の平成10年度報告書である。

2．調査は国庫補助を受け実施しており、平成10年度は六郷山寺院の瑠璃光寺、吉祥寺、貴福寺、真覚寺、妙覚寺、光明寺、寶壽坊、間戸寺の８ヶ寺を対象にした。

3．調査にあたり各寺院に関係する住職・総代をはじめ、地元教育委員会および関係者の協力を得た。

4．遺構の実測・写真撮影は各調査員が実施したが、拓影・製図・写真等で井口あけみ、若知子、今永浩美諸氏の協力を得た。

目　　次

第１章　序説 …… 1
（1）調査の経緯 …… 1
（2）六郷山寺院遺構確認調査一覧 …… 2
（3）調査組織 …… 4
第２章　六郷山寺院の調査 …… 5
（Ⅰ）吉祥寺・貴福寺 …… 5
（Ⅱ）真覚寺 …… 13
（Ⅲ）瑠璃光寺 …… 17
（Ⅳ）妙覚寺 …… 24
（Ⅴ）多福院光明寺 …… 29
（Ⅵ）間戸寺・寶壽坊 …… 36
第３章　おわりに …… 43

図 版 目 次

第１図　六郷山寺院の主要分布図 …… 1
第２図　吉祥寺位置図 …… 5
第３図　吉祥寺実測図 …… 7

第４図　吉祥寺境内の銘文拓影 …… 12
第５図　真覚寺位置図 …… 13
第６図　真覚寺関係各図 …… 14
第７図　瑠璃光寺位置図 …… 17
第８図　瑠璃光寺周辺地形図 …… 19－20
第９図　伝妙覚寺跡位置図 …… 24
第10図　伝妙覚寺跡周辺地形図 …… 25
第11図　伝妙覚寺跡遺構配置図 …… 26
第12図　第４トレンチ実測図 …… 27
第13図　伝妙覚寺跡出土遺物 …… 27
第14図　多福院位置図 …… 29
第15図　多福院周辺位置図 …… 30－31
第16図　出土遺物実測図 …… 32
第17図　第３トレンチ実測図 …… 32
第18図　間戸寺位置図 …… 36

写真図版目次

写真１　吉祥寺遠景 …… 6
写真２　観音堂正面 …… 6
写真３　石垣（C） …… 6
写真４　境内地（B） …… 6
写真５　観音堂 …… 9
写真６　石祠 …… 9
写真７　石塔類 …… 9
写真８　一石五輪塔 …… 10
写真９　住職墓地 …… 10
写真10　石垣（C）の銘文 …… 10
写真11　木造千手観音立像 …… 11
写真12　木造不動明王立像 …… 11
写真13　木造毘沙門天立像 …… 11
写真14　真覚寺国東塔へ至る山道 …… 15
写真15　真覚寺国東塔遠景 …… 15
写真16　真覚寺石塔群 …… 15

写真17　県指定有形文化財真覚寺国東塔 …… 16
写真18　十王堂板碑 …… 16
写真19　瑠璃光寺遠景 …… 21
写真20　三所権現ノ宮 …… 21
写真21　旧本堂を望む …… 21
写真22　石殿 …… 22
写真23　大威徳明王 …… 22
写真24　一石五輪塔 …… 22
写真25　境内に移設された五輪塔群 …… 23
写真26　歴代住職の墓地 …… 23
写真27　歴代住職の墓地 …… 23
写真28　調査区遠景 …… 28
写真29　第１トレンチ …… 28
写真30　第４トレンチ・溝 …… 28
写真31　第１トレンチ …… 34
写真32　第３トレンチ発掘風景 …… 34
写真33　第３トレンチピット …… 34
写真34　第３トレンチ …… 35
写真35　第３トレンチ南東隅 …… 35
写真36　間戸の台地 …… 38
写真37　間戸の朝日岩 …… 38
写真38　間戸二重塔 …… 39
写真39　集会所前に移された宝篋印塔 …… 39
写真40　元禄二年村絵図（小崎村） …… 40
写真41　原の御堂内の釈迦如来像（上）と銘文（下） …… 41
写真42　穴井戸観音石段 …… 42
写真43　堂宇上方崖面にある伝説の鯛 …… 42
写真44　穴井戸観音前庭部の石塔 …… 42

第1章　序　　説

（1）調査の経緯

国東半島には、古代から中世にかけて繁栄した「六郷山」と総称される天台宗寺院が所在する。これらの寺院については、考古学的調査がほとんど行われておらず、寺域や寺の規模、伽藍配置、遺構の状況などの詳細について不明な点が多かった。早く廃寺になったものや無住の寺も多く、なかには位置さえ分からなくなったものも存在する。現在まで存続している寺院にしても、古代や中世の状況は不明な点が多い。

そこで、六郷山寺院の全体像を把握するため、現状の記録と併せて、寺院遺構の存否、遺存状況、寺域などについて確認調査を行い、可能な限りの図化、基本資料の作成を試みることにした。当館では平成4年から平成9年度までの9カ年に及ぶ六郷山寺院の遺構確認調査を国庫補助事業として実施してきたが、総ての寺院を網羅できなかった。そのため平成7年から3カ年にわたりさらに調査を継続し、基礎的資料の蓄積を試みるものである。

なおこれまでの調査例は次のとおりである。

第1図　六郷山寺院の主要分布図（『仁安三年六郷二十八山本寺目録』による）

（2）六郷山寺院遺構確認調査一覧

遺跡名	所在地	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	調査期間	調査原因	備考
吉水山霊亀寺 （万福山吉水寺）	大分県宇佐市大字両戒	寺院	中世・近代	寺院伽藍		97.04.01～ 98.03.31	学術調査	六郷山寺院遺構確認調査報告書Ⅵ 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館報告書第20集　1998年3月31日
横城山 （横城山東光寺）	大分県杵築市大字横城4番地	〃	〃	〃		93.04.01～ 94.03.31	〃	六郷山寺院遺構確認調査報告書Ⅱ 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館報告書第13集　1994年3月31日
夷石屋 （夷山霊仙寺）	大分県西国東郡香々地町大字夷1016番地	〃	〃	〃		94.04.01～ 95.03.31	〃	六郷山寺院遺構確認調査報告書Ⅲ 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館報告書第15集　1995年3月31日
石立山岩戸寺	大分県西国東郡国東町大字岩戸寺	〃	〃	〃		95.04.01～ 96.03.31	〃	六郷山寺院遺構確認調査報告書Ⅳ 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館報告書第17集　1996年3月31日
西方寺 （西方山清浄光寺）	大分県西国東郡国見町大字西方寺	〃	〃	〃		94.04.01～ 95.03.31	〃	六郷山寺院遺構確認調査報告書Ⅲ 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館報告書第15集　1995年3月31日
黒土石屋 （黒土山本松房）	大分県西国東郡真玉町大字黒土　上黒土	〃	〃	〃		93.04.01～ 94.03.31	〃	六郷山寺院遺構確認調査報告書Ⅱ 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館報告書第13集　1994年3月31日
小岩屋山 （小岩屋山無動寺）	大分県西国東郡真玉町大字黒土1475番地（中黒土）	〃	〃	〃		93.04.01～ 94.03.31	〃	六郷山寺院遺構確認調査報告書Ⅱ 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館報告書第13集　1994年3月31日
大岩屋 （大岩屋山應暦寺）	大分県西国東郡真玉町大字大岩屋401番地	〃	〃	〃		93.04.01～ 94.03.31	〃	六郷山寺院遺構確認調査報告書Ⅱ 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館報告書第13集　1994年3月31日
金剛山報恩寺	大分県西国東郡武蔵町大字麻田	〃	〃	〃		95.04.01～ 96.03.31	〃	六郷山寺院遺構確認調査報告書Ⅳ 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館報告書第17集　1996年3月31日
小城寺 （小城山寶命寺）	大分県西国東郡武蔵町大字小城（字中園）449	〃	〃	〃		94.04.01～ 95.03.31	〃	六郷山寺院遺構確認調査報告書Ⅲ 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館報告書第15集　1995年3月31日
丸小野寺	大分県西国東郡武蔵町大字丸小野	〃	〃	〃		95.04.01～ 96.03.31	〃	六郷山寺院遺構確認調査報告書Ⅳ 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館報告書第17集　1996年3月31日
辻小野寺 （辻小野西明寺）	大分県速見郡山香町大字内河野	〃	〃	〃		92.04.01～ 93.03.31	〃	六郷山寺院遺構確認調査報告書Ⅰ 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館報告書第12集　1993年3月31日
津波戸石屋 （津波戸山水月寺）	大分県速見郡山香町大字向野	〃	〃	〃		92.04.01～ 93.03.31	〃	六郷山寺院遺構確認調査報告書Ⅰ 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館報告書第12集　1993年3月31日
久末山護国寺 （興国山護聖寺）	大分県東国東郡安岐町大字朝来	〃	〃	〃		96.04.01～ 97.03.31	〃	六郷山寺院遺構確認調査報告書Ⅴ 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館報告書第19集　1997年3月31日
懸樋 （懸樋山清岩寺）	大分県東国東郡安岐町大字掛樋字筧	〃	〃	〃		94.04.01～ 95.03.31	〃	六郷山寺院遺構確認調査報告書Ⅲ 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館報告書第15集　1995年3月31日
足曳山両子寺	大分県東国東郡安岐町大字両子	〃	〃	〃		96.04.01～ 97.03.31	〃	六郷山寺院遺構確認調査報告書Ⅴ 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館報告書第19集　1997年3月31日

遺跡名	所在地	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	調査期間	調査原因	備考
見地山東光寺	大分県東国東郡国東町大字見地	寺院	中世・近代	寺院伽藍		96.04.01～97.03.31	学術調査	六郷山寺院遺構確認調査報告書V 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館報告書第19集 1997年3月31日
文殊仙寺 (峨眉山文殊仙寺)	大分県東国東郡国東町大字大恩時字文殊	〃	〃	〃		94.04.01～95.03.31	〃	六郷山寺院遺構確認調査報告書III 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館報告書第15集 1995年3月31日
大嶽山 (大嶽山神宮寺)	大分県東国東郡国東町大字横手	〃	〃	〃		94.04.01～95.03.31	〃	六郷山寺院遺構確認調査報告書III 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館報告書第15集 1995年3月31日
万福寺	大分県東国東郡国見町大字櫛海	〃	〃	〃		97.04.01～98.03.31	〃	六郷山寺院遺構確認調査報告書VI 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館報告書第20集 1998年3月31日
龍下山成仏寺	大分県東国東郡国見町大字成仏	〃	〃	〃		97.04.01～98.03.31	〃	六郷山寺院遺構確認調査報告書VI 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館報告書第20集 1998年3月31日
泰社山行入寺	大分県東国東郡国見町大字横手	〃	〃	〃		97.04.01～98.03.31	〃	六郷山寺院遺構確認調査報告書VI 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館報告書第20集 1998年3月31日
鞍懸石屋 (鞍懸山神宮寺)	大分県豊後高田市大字奥畑	〃	〃	〃		93.04.01～94.03.31	〃	六郷山寺院遺構確認調査報告書II 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館報告書第13集 1994年3月31日
加礼川山道鶴寺	大分県豊後高田市大字加礼河	〃	〃	〃		96.04.01～97.03.31	〃	六郷山寺院遺構確認調査報告書V 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館報告書第19集 1997年3月31日
大折山 (大折山報恩寺)	大分県豊後高田市大字來縄	〃	〃	〃		92.04.01～93.03.31	〃	六郷山寺院遺構確認調査報告書I 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館報告書第12集 1993年3月31日
今熊山胎蔵寺	大分県豊後高田市大字平野	〃	〃	〃		96.04.01～97.03.31	〃	六郷山寺院遺構確認調査報告書V 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館報告書第19集 1997年3月31日
稲積山慈恩寺	大分県豊後高田市大字平野	〃	〃	〃		97.04.01～98.03.31	〃	六郷山寺院遺構確認調査報告書VI 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館報告書第20集 1998年3月31日
馬城山伝乗寺	大分県豊後高田市大字真中	〃	〃	ピット	土師器・陶磁器	95.04.01～96.03.31	〃	六郷山寺院遺構確認調査報告書IV 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館報告書第17集 1996年3月31日
日野山岩鶴寺	大分県豊後高田市大字横嶺	〃	〃	寺院伽藍		95.04.01～96.03.31	〃	六郷山寺院遺構確認調査報告書IV 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館報告書第17集 1996年3月31日
後山石屋 (後山金剛寺)		〃	〃	〃		92.04.01～93.03.31	〃	六郷山寺院遺構確認調査報告書I 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館報告書第12集 1993年3月31日
高山寺 (西叡山高山寺)		〃	〃	〃		92.04.01～93.03.31	〃	六郷山寺院遺構確認調査報告書I 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館報告書第12集 1993年3月31日
大谷寺 (小渓山大谷寺)		〃	〃	〃		92.04.01～93.03.31	〃	六郷山寺院遺構確認調査報告書I 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館報告書第12集 1993年3月31日
千燈岩屋 (補陀落山千燈寺)		〃	〃	〃		93.04.01～94.03.31	〃	六郷山寺院遺構確認調査報告書II 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館報告書第13集 1994年3月31日

（3）調査組織

1　調査責任者　　大分県教育委員会　　教育長　田中恒治

2　調査委員および調査員の構成

調査委員	小田富士雄	福岡大学教授（福岡県筑紫野市）	
	関　秀夫	大正大学教授（東京都豊島区）	
	時枝　務	東京国立博物館展示室長（群馬県高崎市）	
	飯沼賢司	別府大学教授　（大分県別府市）	
	後藤宗俊	別府大学教授（大分県大分市）	
調 査 員			
	首藤安男	大分県立歴史博物館館長	
	目野富雄	同	副館長
	甲斐忠彦	同	学芸課長
	真野和夫	同	調査課長
	渡辺文雄	同	主幹研究員
	山田拓伸	同	主幹研究員
	菅野剛宏	同	研究員
	櫻井成昭	同	研究員
	堤　真子	同	嘱託
	渋谷忠章	大分県教育庁文化課主幹兼文化財管理係長	
	坂本嘉弘	同　埋蔵文化財第・係長	
	金田信子	国東町教育委員会文化財係長	
	長尾和利	国見町生涯学習課係長	
	松本啓子	安岐町教育委員会主査	
	河野典之	豊後高田市教育委員会社会教育課技師	
調査担当	高橋　徹	大分県立歴史博物館主幹研究員	
調査事務	岡本義博	大分県立歴史博物館総務課長	

3　調査協力

以下の方々の御協力・御教示を得た。記して謝意を表したい。

河野了、安井一雄、秦つとむ、猪俣幸男、山柿久美、猪俣康太、山下侑一、瑠璃光寺住職藤岡映真、藤岡俊道、藤岡詩子、高森精、吉武弘道、今成幸子、吉田春美　石垣幸子、山中スズ子
（敬称略、順不同）

第２章　六郷山寺院の調査

（Ⅰ）吉祥寺・貴福寺

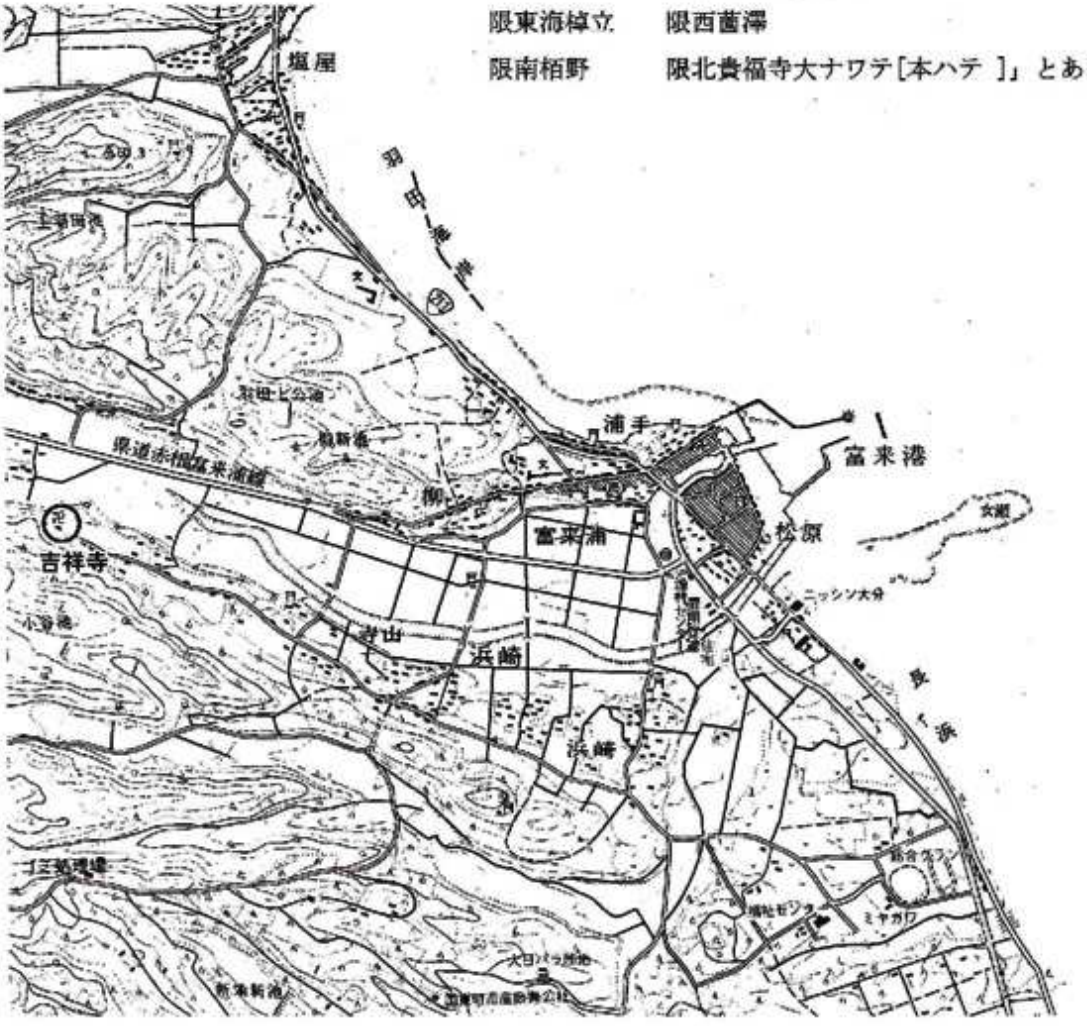
１ 位置と環境

吉祥寺は国東町寺山に所在する。県道赤根富来浦線の寺山入口バス停から富来川を渡り、寺山部落の西端、富来川にそって東西に延びる低丘陵の裾に立地する。国東町史によると本寺はもと、仁聞菩薩の開基と伝えられ、文和年間に万弘寺の豊山正義禅氏を開祖としてその末寺となり臨済宗妙心寺派として今日に至るという。吉祥寺に関する記録としては以下ものが知られている。

すなわち、『太宰管内志』は「同書（天明年中六郷山寺院名簿）に末山分吉祥寺云々とあり吉祥寺ノ事いまだ考えず[国人云]吉祥寺は飛来荘寺山門にあり文殊仙寺の末寺なり」と記す。

『仁安三年六郷二十八山本寺目録』には末山分末寺　として、吉祥寺・貴福寺の名が見られる。建武４年（1337）永弘文書『六郷山本中末寺次第並四至等注文案』には

「末山末寺　・　吉祥寺　付貴福寺
限東海棹立　　限西薗澤
限南栢野　　限北貴福寺大ナワテ[本ハテ]」とある。



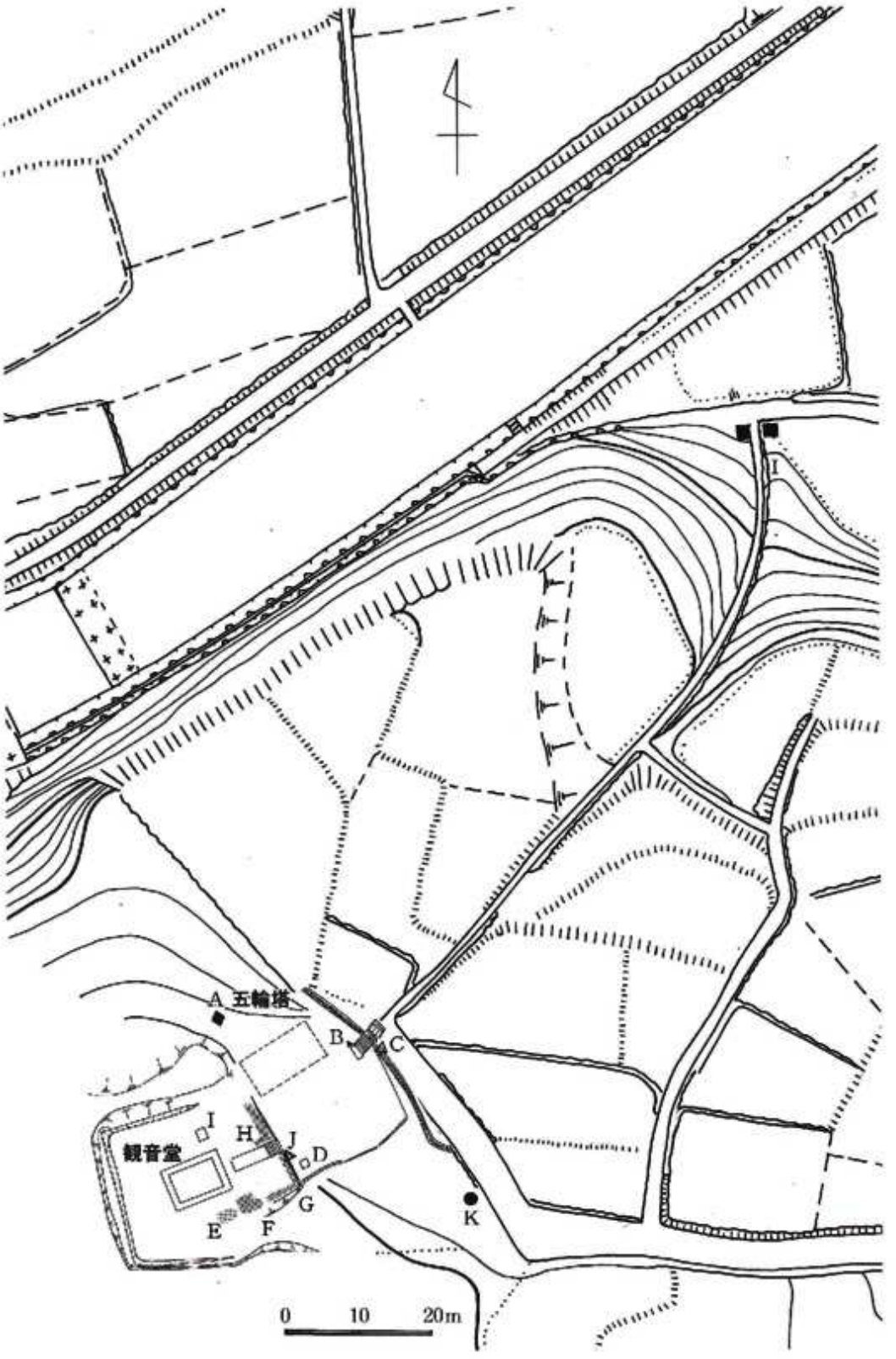
第２図　吉祥寺位置図

写真１
吉祥寺遠景

写真２
観音堂正面

写真３（左）
石垣（C）

写真４（右）
境内地（B）



第3図　吉祥寺実測図

2 遺構の状況

堂宇・庫裏（第３図）

現在、吉祥寺は万弘寺住職の兼務するところとなっており、無住である。富来川の右岸から始まる（I：石灯篭）長さ100m程の石畳の参道を上ると、石垣を備えた２段の境内地（およそ810坪）に達する。上段の敷地内には８坪弱の瓦葺堂宇（観音堂と称されている）と石塔類が、下段の境内には井戸（第３図D）が残っている。後者には近年まで庫裏（B）が建っていたが今は取り壊されてその痕跡も無い。観音堂は大正時代に建て直されたもので、８m×４mと小規模である。内部には町指定文化財の木造千手観音立像、不動明王立像、毘沙門天立像各１体が安置されている。これらは室町時代～南北朝初頭に位置づけられ、その仏像の組み合わせと配置の形式は典型的な天台宗寺院のそれである。当寺がまさしく天台系の寺院であったことを物語っている。その他堂内には室町時代～江戸時代の十王像や柄鏡（３点）等が保存されている。

墓　地

観音堂が建つ敷地の西側は現在竹林となっているが、20mほど奥まったところに小さな墓地がある。写真９に見られるように倒壊した無縫塔１基と石祠があるだけで、無縫塔は江戸末期のものである。住職の墓はもう一カ所あり（K）、ここには２基の墓石が並ぶ。江戸時代以前に遡る住職墓は他に見あたらないが、竹林となっているA地点で、埋没した五輪塔数基を確認している。E地点にも寄せ集められた一石五輪塔群がある。中世の吉祥寺に関するものであろうか。

石造物・その他

境内地の石造物としては手水鉢・石灯篭（F、H）、石祠（F）、記念碑（E、I）等で、すべて江戸以降、大正時代までのものである。

上・下段を形成するそれぞれの石垣（C，J）には、安正４年の年号を刻む銘文があり、現在の境内地が造成された年代を知り得る。銘文は次のとおりである。

石垣の銘文［C］（写真３、第４図C）

安政四巳春日
奉寄進
同行中　真城佐太郎
願主　井上光太郎
井上大吉
夫力　氏子中

石垣の銘文［J］（第４図D）

安政四巳春日
願主　大村吉治郎
夫力　氏子中

なお、前述の諸記録中に散見される貴福寺については、その寺跡はおろか所在地さえも特定できない。『六郷山本中末寺次第並四至等注文案』にいう「吉祥寺」が現在地と重なる場所にあったのなら、この北方に貴福寺が存在していたはずである。現吉祥寺の対岸丘陵裾に貴福寺と称す地名が残るという伝承もあるが、その真偽を確かめることができなかった。

なお、萬弘寺所蔵の仏像で最古のものは、平安時代後期の作と考えられている樟材一木造りの薬師如来立像（高さ117.6cm）であるが、先代住職の談によると、本像は吉祥寺から移されたものであると伝承されている。

写真５　観音堂（南から）

写真６　石　祠

写真７　石塔類

写真８　一石五輪塔

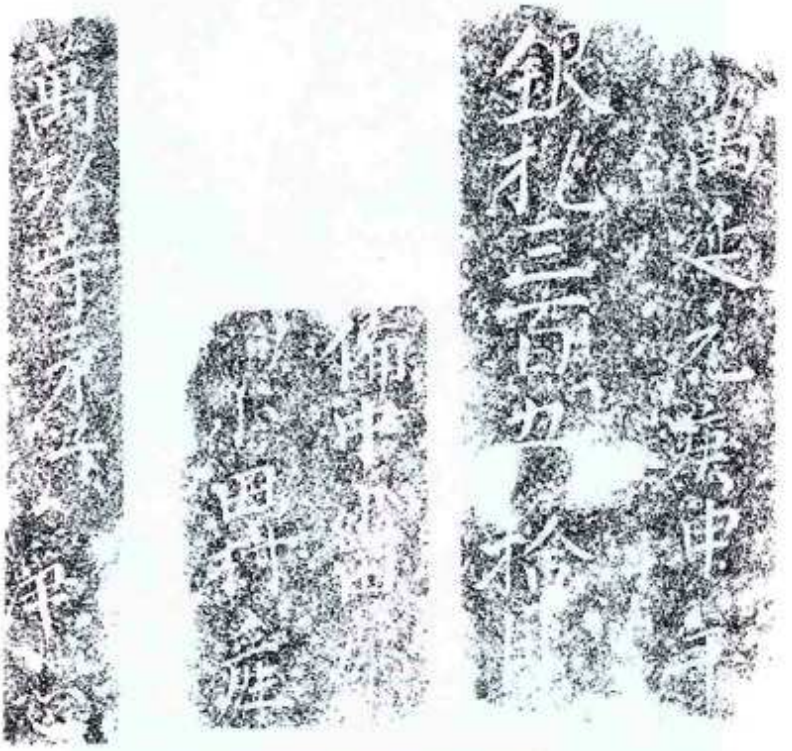
写真９　住職墓地

写真 10　石垣（C）の銘文

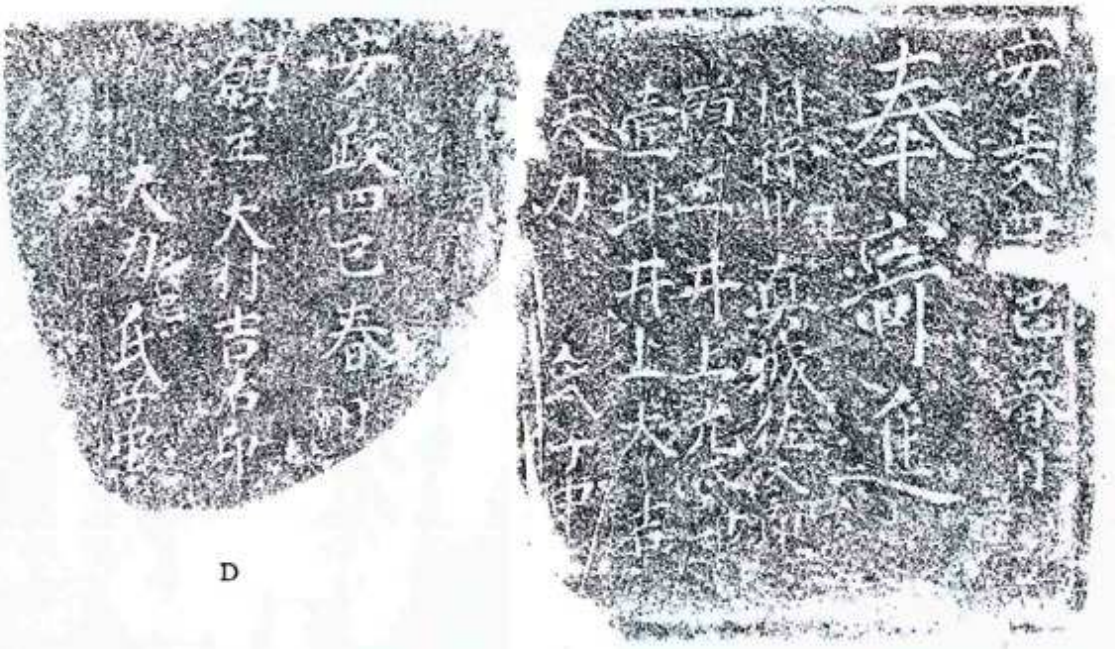
写真 11
木造千手観音立像

写真 12（下・右）
木造不動明王立像

写真 13（下・左）
木造毘沙門天立像



境内地（B）の石碑に刻まれたもの



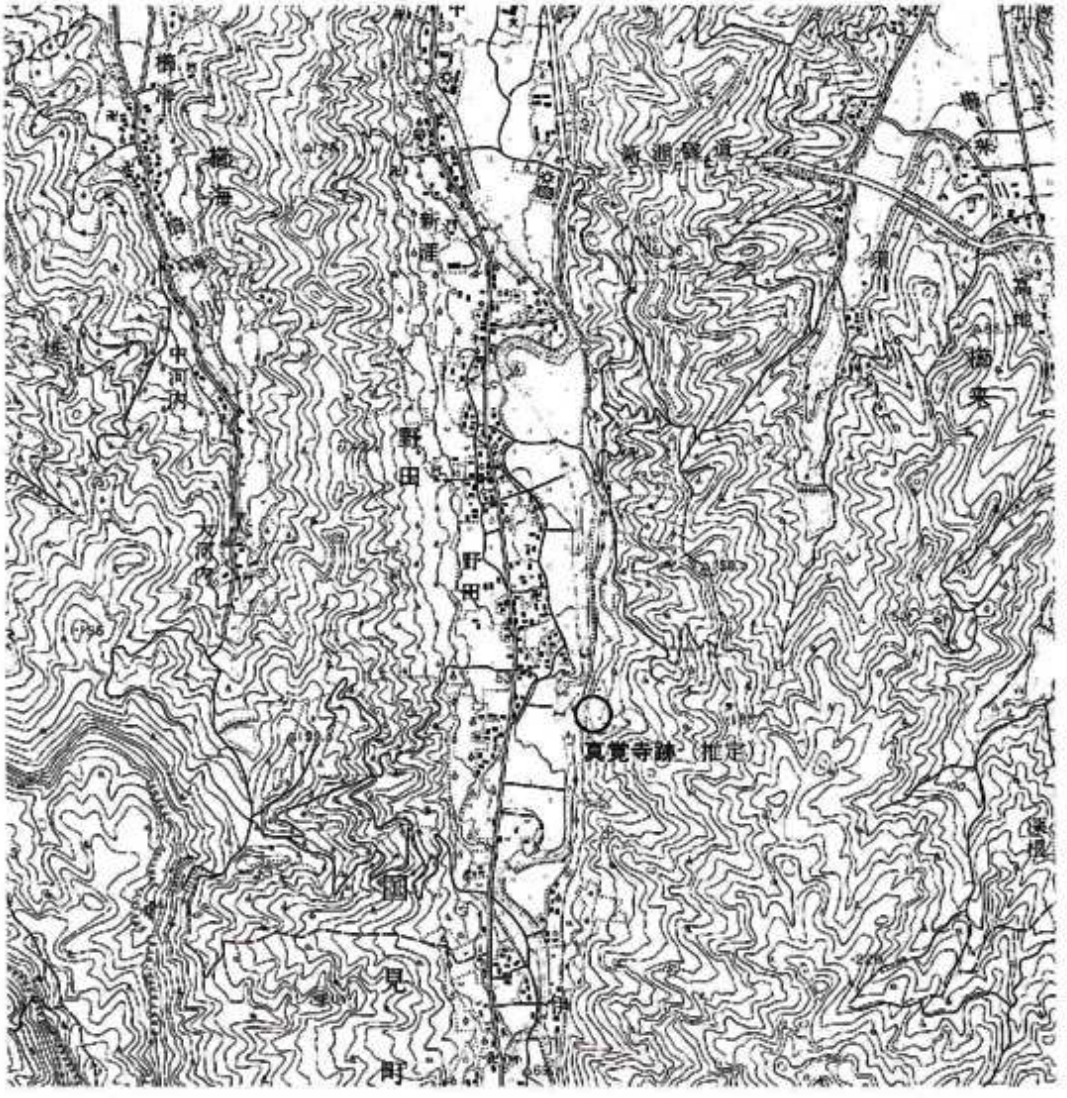
D

C

第４図　吉祥寺境内の銘文拓影

（Ⅱ）真覚寺

『仁安三年六郷二十八山本寺目録』に中山分末寺とある真覚寺は『太宰管内志』に、「[国人云]真覚寺は竹田津ノ野田村にあり小庵なり」と記されている。その寺跡は国見町大字野田字寺上の山中に比定されているが、その実態は詳かではない。伊美川の右岸に位置する十王堂から岸伝いに200mほど上流に遡り、寺上氏宅の庭先を通って裏山の小道を60～70m登ると、真覚寺国東塔と記された矢印のある地点にたどり着く。ここからおよそ20m進むと丘陵斜面を等高線に沿ってならした平場がある。平場は不定形で2段あり、上段に15基の石塔が、下段に1基の国東塔が置かれている。これらの石造品はもともと真覚寺墓地にあったものを寺川正次氏がここに移したものという。真覚寺墓地と言われている場所はここから70、80m上った畑地で、石の階段や石垣、井戸などが残された平地が存在する。野田在住の高森精氏によれば、寺跡をさらに上った頂上近くに立っている墓碑に、真覚寺に30年間住み、弘化巳の年に没した僧守忍の記述があり、少なくとこの頃までは真覚寺の堂宇は存在していた可



第5図　真覚寺位置図

能性があるという。

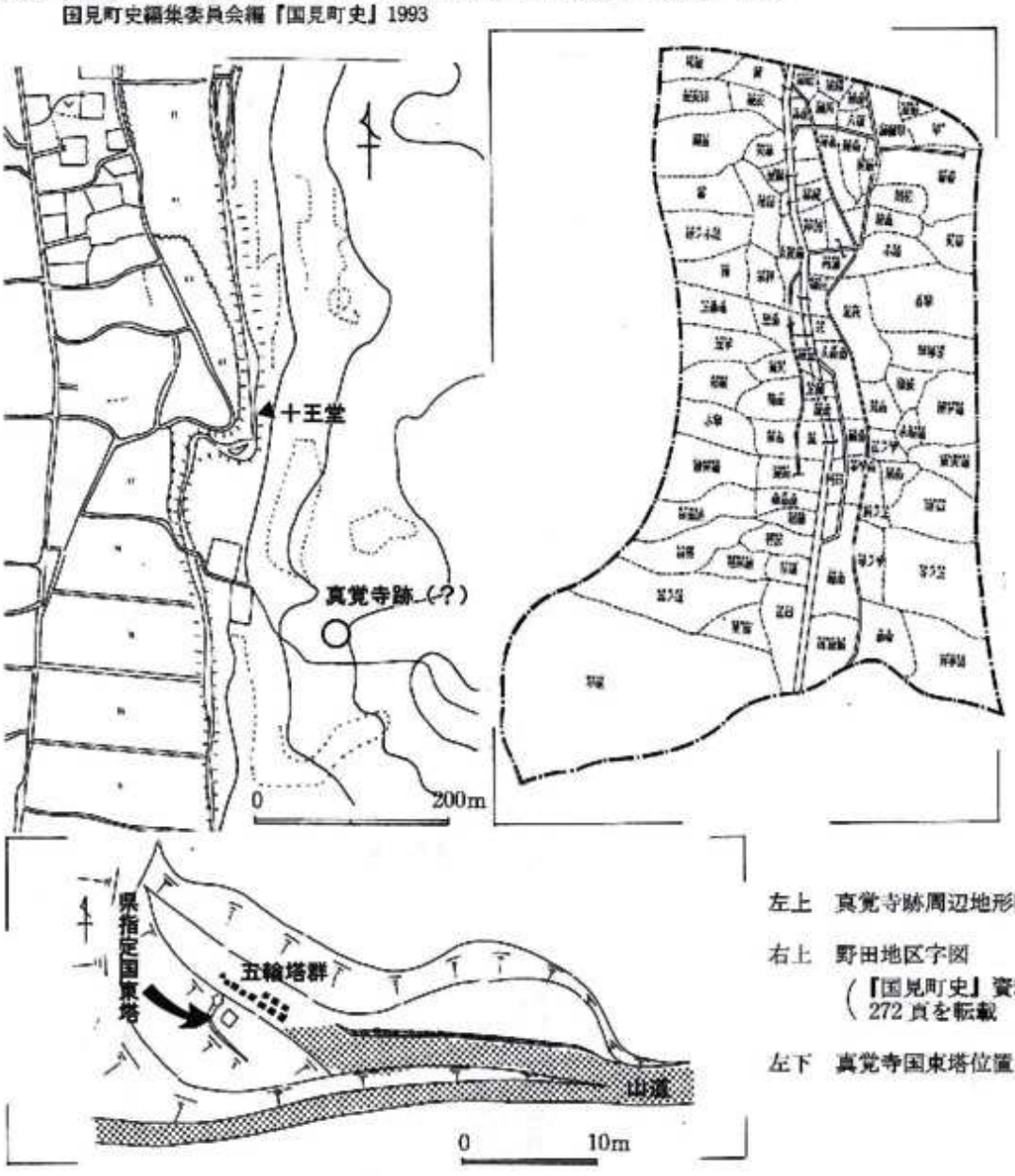
真覚寺国東塔（1号）　県指定文化財。相輪を欠く。総高168cm。以下の銘文がある。

銘　敬白　□□観世音菩□御□　奉造立塔□・基　右志□者、為□□□□□　□□□□□□□□□
□□□□□□□□入□□□□□□□　平□□□□□□□□□□□　□□□□□□□□□□　木□□□□□
正平七季二月十九日　大願主□□　□氏□

2号国東塔他石塔

2号国東塔は総高101cm。他の石塔は後家あわせされたもので、室町時代初期から江戸時代後期までと幅がある。

参考文献　高森精　「旧千塔寺末寺-全光寺、真覚寺、平等寺-」『国見物語』第9集　1989
国見町史編集委員会編『国見町史』1993



左上　真覚寺跡周辺地形図

右上　野田地区字図
（『国見町史』資料編 272頁を転載）

左下　真覚寺国東塔位置図

第6図　真覚寺関係各図

写真 14
真覚寺国東塔へ至る山道

写真 15
真覚寺国東塔遠景

写真 16
真覚寺石塔群

写真 17
県指定有形文化財真覚寺国東塔

写真 18
十王堂板碑

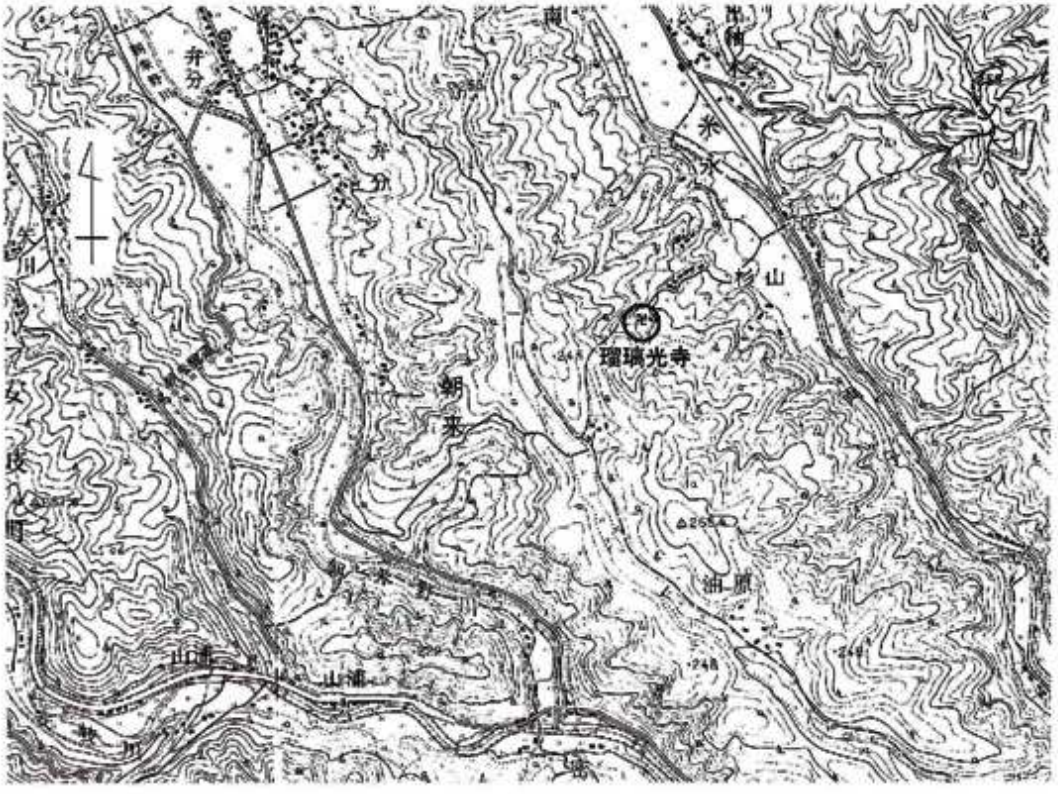
（Ⅲ）瑠璃光寺

瑠璃光寺は安岐町大字糸永字杉山に所在する。両子川右岸の丘陵南側尾根の裾に立地する。寺院明細帳には、養老二年、仁聞菩薩開基。宝永五年（1708）住職寛度が再興とある。仁安目録に末山分末寺、両子寺蔵安永五年（1776）の「天台宗豊後国六郷山寺院名簿」には、一　安岐郷杉山村杉山瑠璃光寺　同領、壇那七軒　、一　本堂薬師、一　鎮守三所権現宮、一　山神社、一　浄仙院、寄付八畝、年貢地三段と記す。[注1] これと同様の内容が、天明年中六郷山寺院名簿（太宰管内志）にあり、18世紀後半の状況を窺える。ところが、明治初年ごろになると、「　無住　滅罪檀家拾軒　」と急速に零落し、建物も本堂庫裏三拾壱坪、式坪の雪隠という状況であったという。寺はその後も有住、無住を繰り返しながら現在に至っている。

瑠璃光寺の現況

境内・本堂・講堂・庫裏

水田を造成した駐車場から短い石段を上り、一段高い整地した平坦地に本堂と庫裏、鐘楼がある。現本堂は講堂の跡に建てられたもので、間口・奥行各五間の方形プランを呈した宝形形造瓦葺建物である。床下の礎石は50～60cm四方の安山岩製だが旧講堂のものをどの程度利用したのかは表面観察では判然としない。講堂については、安永や明治初年の記録に見えず、その段階では既に失われて久しかったと考えられている。明治16年の棟板が知られており、講堂はこの年に再建され、明治25～26年頃に火災に遭ったという。現本堂はこれを改築したもので、屋根も茅葺きであった。



第7図　瑠璃光寺位置図

旧本堂

本来の本堂はおよそ100mほど北に位置する場所に在ったという話が伝わっている。現在は石垣を積んだ短冊形（35m×10m）の水田となっており、かって礎石と思われる平石が出土したと言う。いま本堂北側の境内地に並べられている五輪塔群は、この旧本堂上手の丘陵上（A）に埋没していたものであり、当地に本堂のあったことを傍証する事実かも知れない。

三所権現

本堂敷地の庫裏の北側に石段と三所権現の堂宇が存在する。堂は天明の記録にはあるが明治初年には消失していたらしく記されていない。現在の建物は間口5m、奥行き6mで近年に建て替えられたものである。10m×8mの平坦な敷地と石の階段はおそらく、少なくとも江戸期までは遡るものであろう。

墓　地

旧本堂の北およそ100mの山林中に歴代住職の墓地がある。墓地は幅4m、長さ15mの平坦地に営まれており、片側に9基、反対側に5基の墓石が並ぶ。無縫塔形式が2基で位牌形が5基、笠塔婆形が2基となっている。古い墓碑は宝永7年（1710）の没年が記されていて、以後順次嘉永2年（1849）と続く。これらより古い墓は確認されておらず、先述した五輪塔群が寺伝の年代を示唆するに留まる。

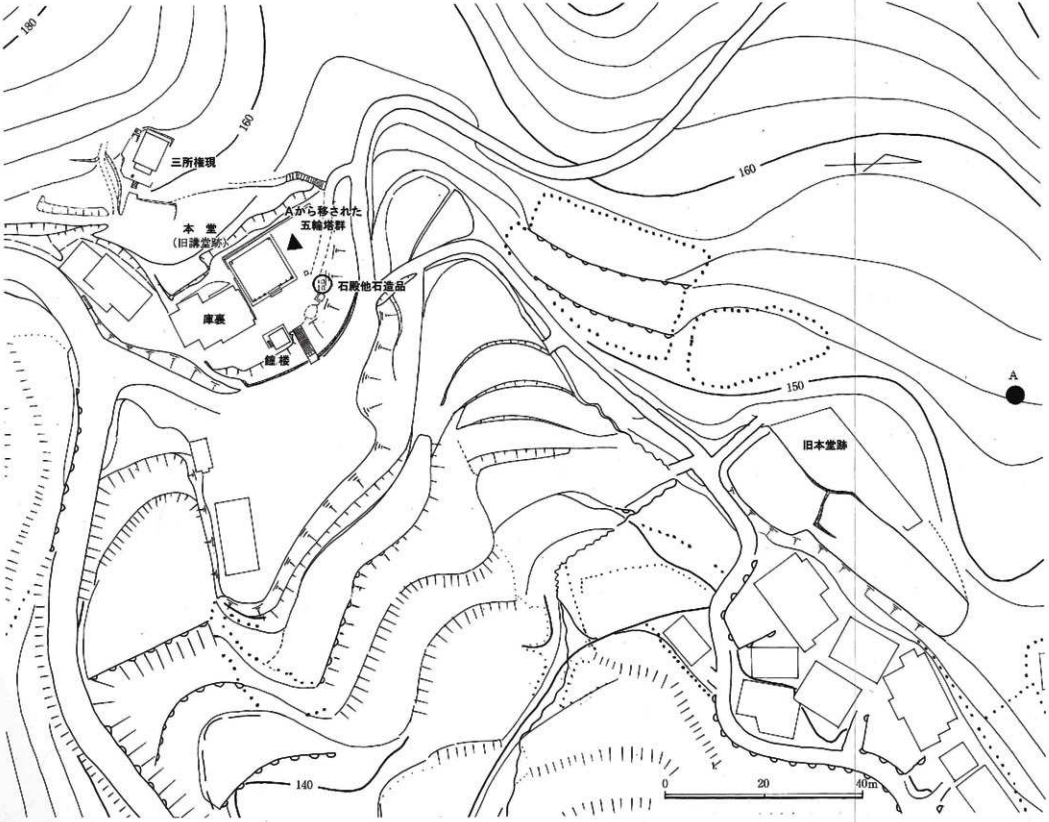
石造物

瑠璃光寺境内地の石造物は五輪塔、石祠等近隣から寄せ集めたものが多くその本来の所在地や所属は不詳と言わざるを得ない。古いものとしては、石殿（但し中台は別個体のもの）があり、笠や反花部は鎌倉時代と推定されている。A地点から移した石塔類には通常の五輪塔に混じって地輪上面に反花を施す例が多く、室町末前後に時期比定されている。

その他

本堂に安置する仏像は平安中期から江戸後期に比定され（阿弥陀如来立像1躯、釈迦如来立像1躯、薬師・日光・月光・十二神将立像12躯、不動妙王・二童子立像3躯）、他にも鎌倉中期～元禄年間に製作の鬼面等が所蔵されている。

註1　青山賢信「大郷山寺院の建築」『大郷山関係文化財総合調査概要Ⅰ』大分県文化財調査報告書　第38輯　大分県教育委員会



第８図　瑠璃光寺周辺地形図

写真 19
瑠璃光寺遠景

写真 20
三所権現ノ宮

写真 21
旧本堂を望む

写真 22
石　殿

写真 23
大威德明王

写真 24
一石五輪塔

写真 25
境内に移設された五輪塔群

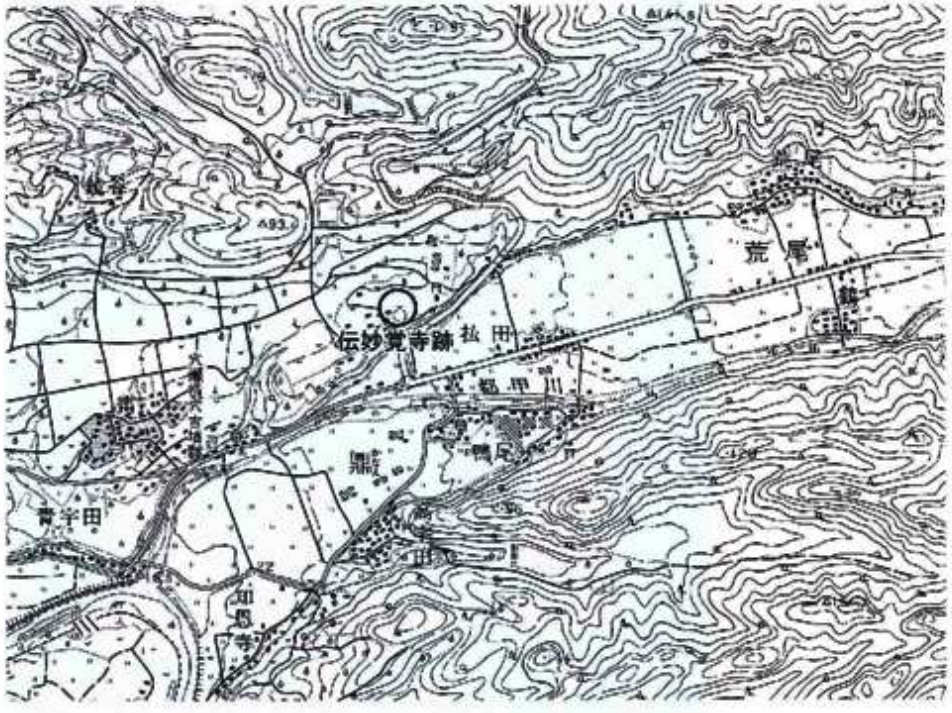
写真 26
歴代住職の墓地

写真 27
歴代住職の墓地

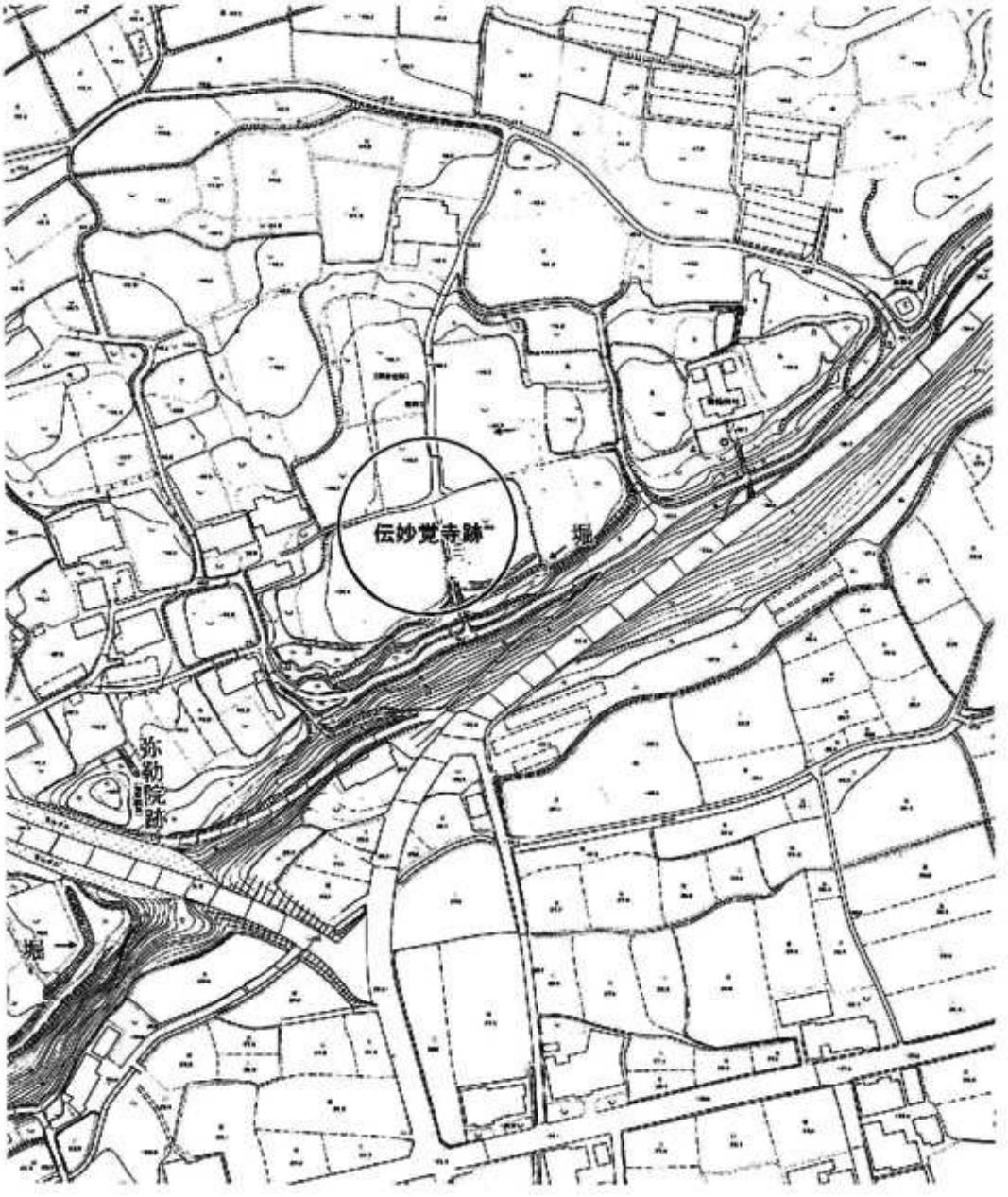
（Ⅳ）妙覚寺

現在の妙覚寺は豊後高田市荒尾に所在する曹洞宗寺院である。西国東郡誌によれば、本寺はそもそも、養老年間の開基でその後廃絶するが、横手村本護寺二世和尚が払田村より当地に移して、明巌鏡照和尚を請うて中興の開祖とする。「六郷山定額院主目録」（太宰管内志）には都甲ノ荘麟治山妙覚寺院主賣宅院高山寺ノの徒と記す。建武四年六月一日の六郷山本中末寺次第並四至等注文案には高山の末寺として記載されている

今、伝妙覚寺跡といわれているのは、上払田の丘陵上にあり、当館の前身である宇佐風土記の丘歴史民俗資料館によって1989年度遺構確認調査が行われている。[註1] 場所は都甲川を見下ろす上払田丘陵の南端で、貴船神社の西250m、通称御堂野と呼ばれる一段高い畑地である。ここに試掘トレンチが設定され、調査の結果、中世の溝遺構、土塁、弥生時代の住居跡、土坑、扁平な石塊4個、河原石多数が検出された。4個の石は直径70～80cmほどの大きさで、土坑内に多数の河原石とともに廃棄されていた。本来の位置からは動いた二次的な出土状況である。土坑から出土する遺物としては、宝塔宝珠部、五輪塔の残片、備前焼擂鉢、瓦質火鉢・鉢、土師質小皿で、いずれも16世紀代に比定されている。検出された溝や土塁以外にも払田の丘陵には堀、土塁遺構が存在しており、その一部は16世紀代以前に遡る。これらは中世以来当地に居住した弥勒寺の所司の屋敷跡であろうと推測されている。[註2]「礎石」の大きさや瓦が未出土であるという調査結果および文献、伝承から、当地区に「古代まで遡る」瓦葺ではない「大型の礎石建物」すなわち妙覚寺が存在した可能性は高いと考えられている。

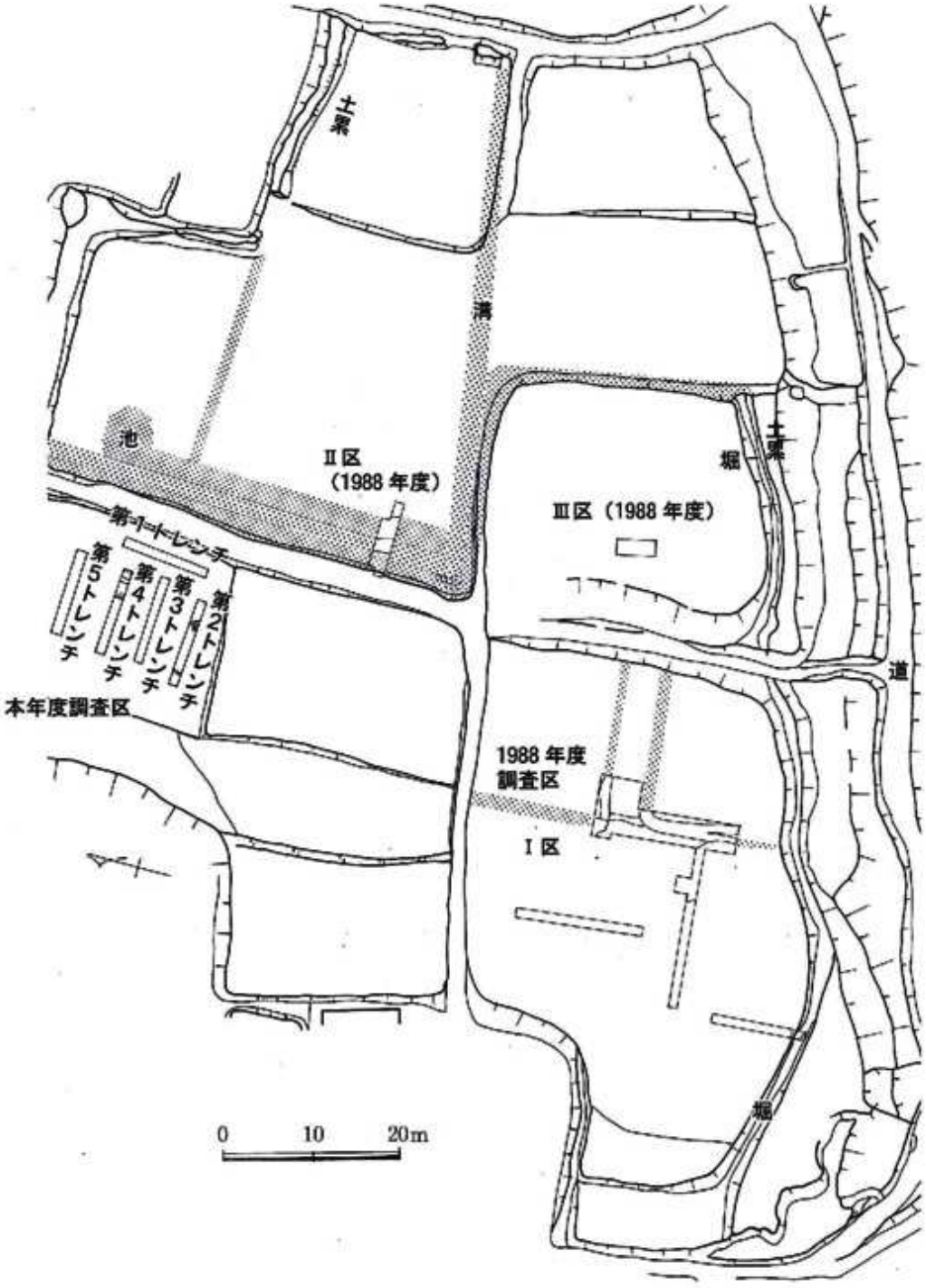


第９図　伝妙覚寺跡位置図

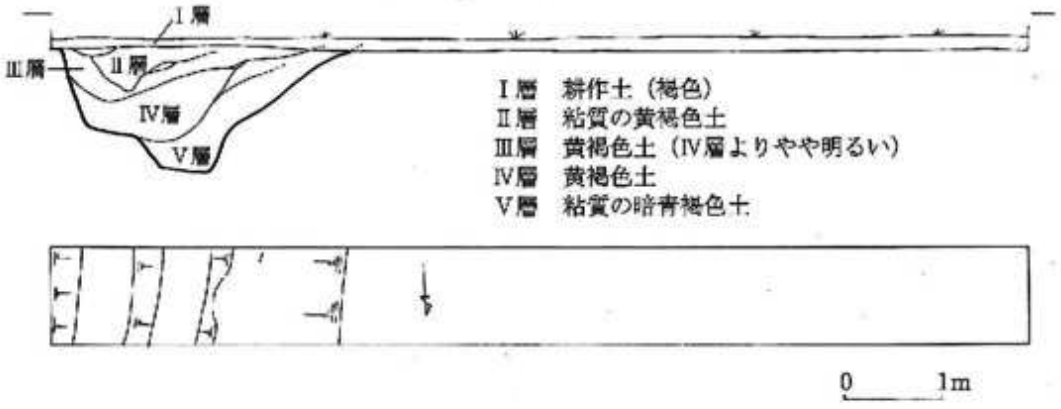


第10図　伝妙覚寺跡周辺地形図

しかしながら、出土した「礎石」状の平石が寺院建築の礎石であり、かつこれが古妙覚寺に関連するものかどうかは出土遺物の状況からは断定し難い。よって、今回は先の調査ではトレンチ調査が入っていない隣接する畑地で遺構確認の調査を実施することにした。なお調査地区一帯は近年平坦に造成さており、いままで露出していた溝や土塁も埋められたり、削平されている。



第 11 図　伝妙覚寺跡遺構配置図



第12図　第4トレンチ実測図

本年度の試掘調査結果

第1～第5トレンチ（第11図、12図）

幅1m、長さ10mのトレンチを5本設定した。土層の層序は基本的に、深さ20cmの耕作土とその下の赤褐色地山層である。

第1、第3トレンチでは遺構、遺物の検出は認められず、第2および第4トレンチで遺構を確認した。すなわち、第2トレンチでは幅6m、深さ30cmの掘り込みを検出し、これの埋土中および床面から土器片少量が出土した。床面から出土した土器は小さい平底を持つ鉢で、内湾気味の体部から先端の尖った口縁部へ続く。復原口径16cm。色調は黄褐色で、胎土にはカクセン石と微細な粒子が多く含まれている。内外面は風化のため調整を観察できない。時期は弥生終末に比定する。

第13図　伝妙覚寺跡出土遺物（1988年度調査分）

第4トレンチでは断面逆台形の溝状遺構が発見された。溝状遺構は二つ有り、下位の溝を上位の溝が切っている。溝埋土から現代の瓦片が数点出土しており、この溝がごく最近になって埋められたことを示している。

以上のように今回の調査によっても、「礎石」（?）の形状や大きさから想定されているような寺院跡の痕跡はつかめなかった。考古学的には、古妙覚寺跡はいまだ特定されていないと言わざるを得ない。今後の調査・研究を待ちたい。

註1　飯沼賢司・後藤一重「伝古妙覚寺の探索」『豊後国都甲荘2』1989

2　飯沼賢司「中世の耕地と集落」『豊後国都甲荘の調査　本編』1993

写真 28
調査区遠景

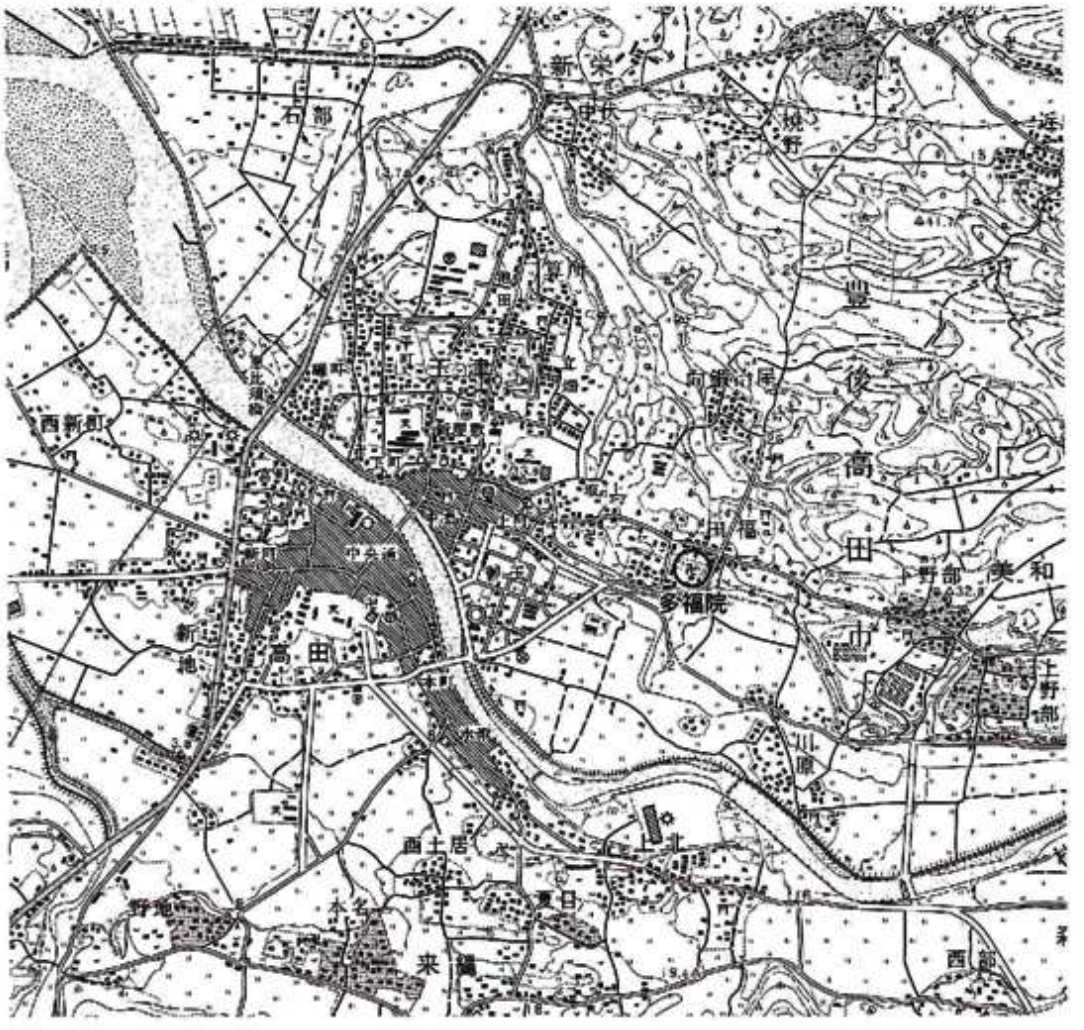
写真 29
第 1 トレンチ

写真 30
第 4 トレンチ・溝

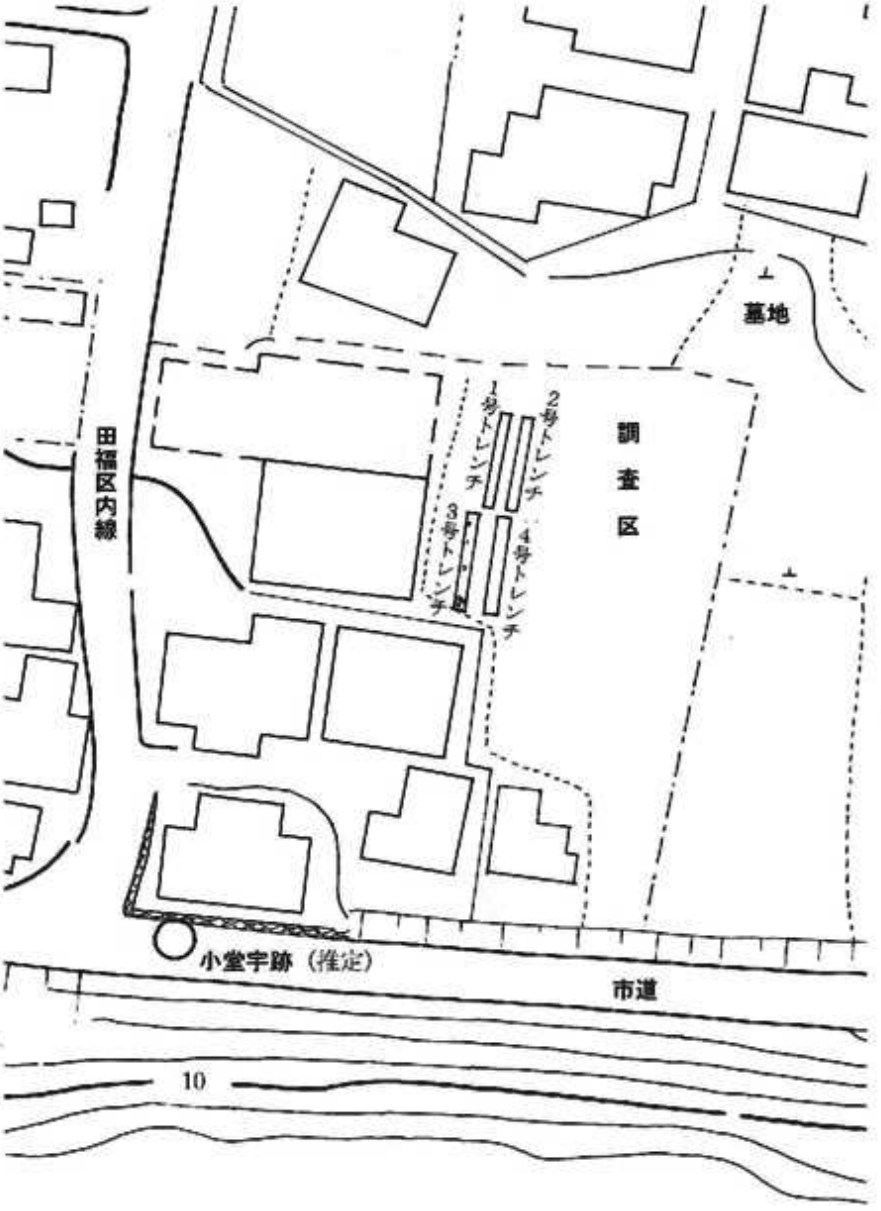
（V）多福院光明寺

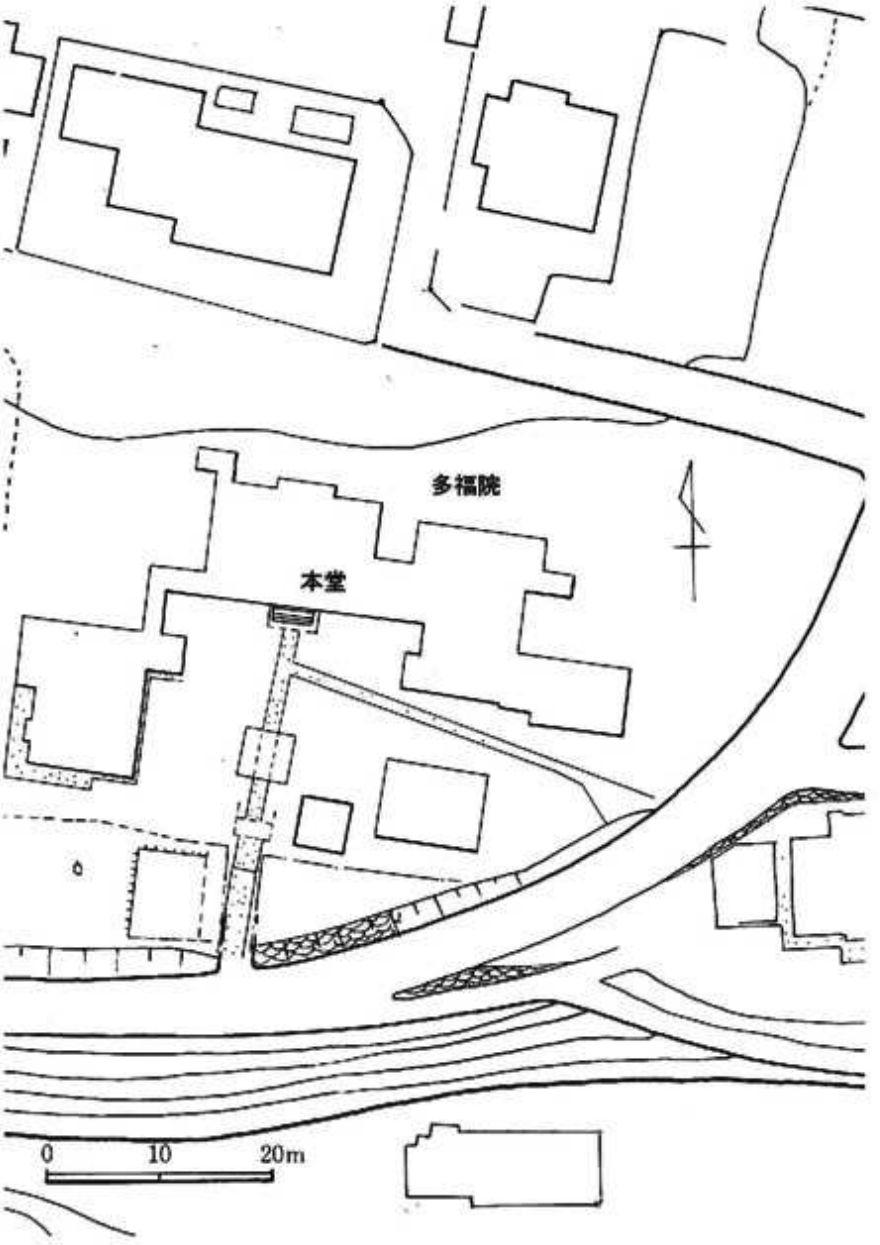
光明寺は仁安目録に、中山分末寺　多福院光明寺　とあり、「六郷山定額院主目録」に「峯岑山光明寺院主多福院佛田共十二箇所、高田ノ玉井ノ事光明皇后ノ祈願所同断分などあり此寺ノ事いまだかんがへず」と記載。多福院は豊後高田市美和に所在する曹洞宗の寺院で、応永元年（1394）融徹および川野元信を開基として豊田山多福院を興すという（西国東郡志）。

今、多福院は独立台地上の南端部に立地し、講堂、庫裏、鐘楼の諸堂とこれに付随する墓地からなる。山門の前を走る市道は戦後になってかっての小道を拡張したもので、いまも名残の小道が一部残っている（第15図　B地点）。多福院住職安井一雄氏によると、寺域の西側を過ぎ、市道と田福内線が交わる場所付近（同図C地点）に、かって小堂があり、ここに安置していた仏像が今多福院に移されているという。像は高さ1m未満の小像で、平安時代の作である。この仏像と小堂がかっての光明寺に由来するものであろうか。今は、伝承をのみ根拠にしてこの周辺に光明寺跡を想定しておく。とは言え、幾ばくかでも手がかりをと考え、今回、多福院敷地の西側に位置する畑で、遺構の有無を確かめる試掘調査を試みた。

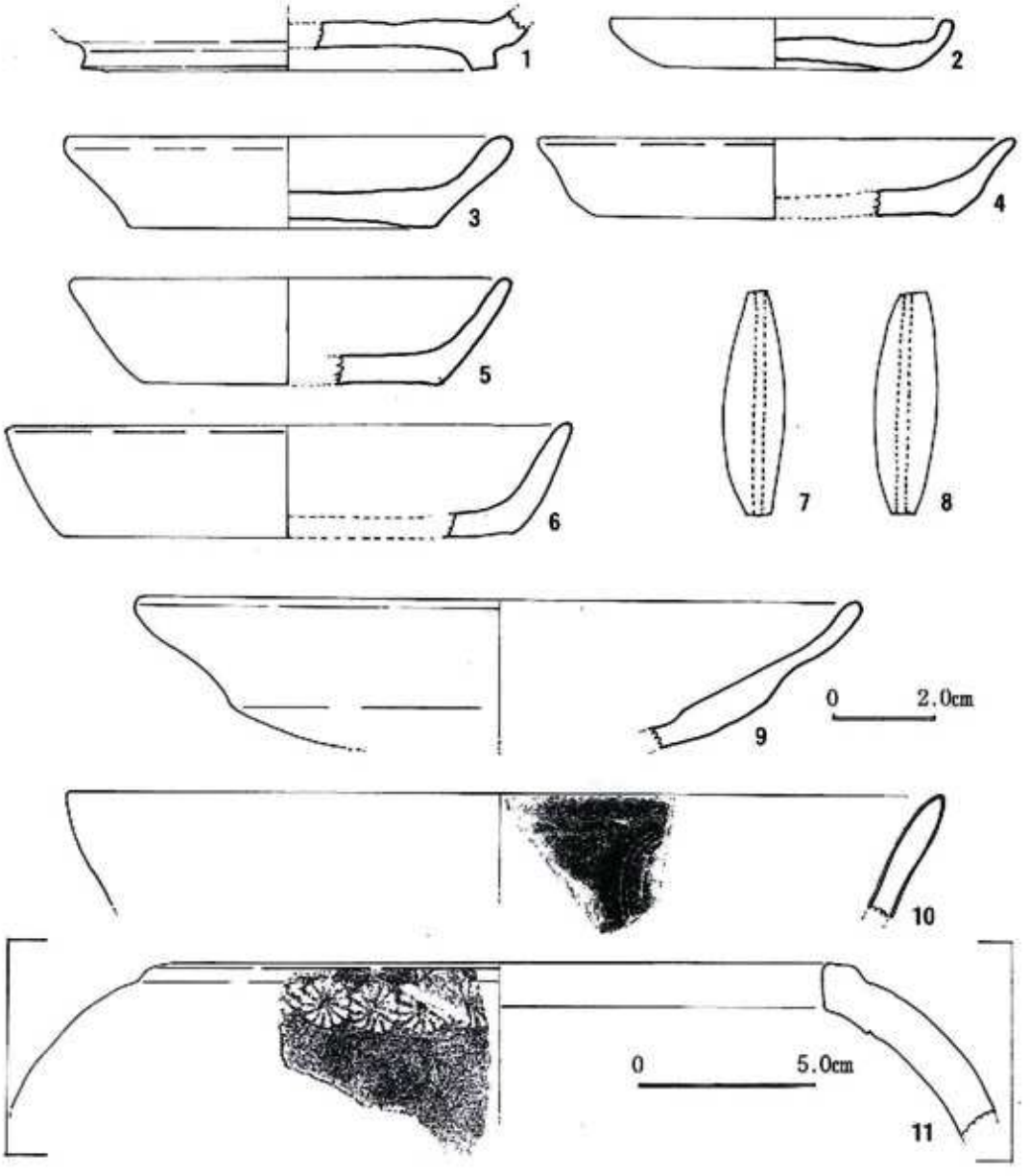


第14図　多福院位置図

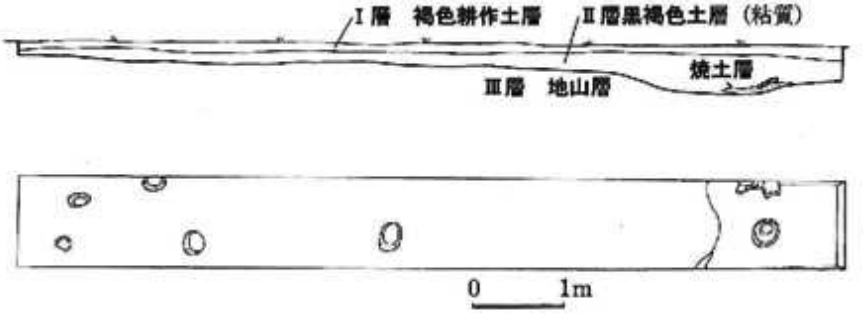

墓地
調査区
1号トレンチ
2号トレンチ
3号トレンチ
4号トレンチ
田福区内線
小堂宇跡（推定）
市道
10



第15図　多福院周辺位置図



第16図　出土遺物実測図



第17図　第3トレンチ実測図

トレンチ調査の結果

調査地は現在平坦な畑地で、20～30cmの耕作土を除去すると、比較的堅くしまった黄褐色の地山にたどり着く。第3トレンチのみで、遺構および遺物が確認された。検出したピットは6個で、径15cm～30cm、深さ20～30cmとまちまちである。これらが総て意味のある柱穴とは断じ難いが、ただ、トレンチ中央および南側の2つはしっかりしたものである。またトレンチ南側はなだらかに落ちる窪みとなっており、その床面には焼土と小礫が見られた。柱穴とも併せて考えると、付近に何らかの遺構が存在していたのかもしれない。

出土遺物（第16図）

第3トレンチの第Ⅱ層はやや粘質気味の黒褐色土で、土器片等を含む遺物包含層である。出土遺物の主体は土師器の細片で他に土錘や鉄片が少量ある。

1は須恵器の高台付底部で、高台径8.4cm。上半分が不明だが歴史時代の坏身であろう。なお、調査区一帯の畑や多福院住職墓地付近で古墳時代の須恵器が表面採集される。古墳等が存在していた可能性がある。

2～6は土師器の皿。色調は明るい黄褐色。胎土に細かい砂粒や黒色の微粒子を含む。風化でよく観察できないが底部は糸切離しのようである。2は径7cm弱と小さく、3～5が径9cm台、6は径10.5cmを測る。

7は瓦器碗で復原口径14.5cm、器高3cm。

10は龍泉窯系輸入青磁碗の口縁部片。

11は内径13cmの無頸陶器。外面は炭素を吸着し青灰色で、かつ研磨され光沢がある。連続する菊花文様のスタンプが施されている。内面は横方向の撫で調整。体部は下半部を欠くが球形に復原され、器種としては火舎の類を想定する。

7、8は土錘で長さ4.5cm。他にも数個体出土している。

以上の他に近世陶磁器や釘状の鉄片が少量出土している。1を除けばおおむね13世紀代および16世紀代のものが多く、当地区には今回検出されたピット以外にも当該期の建物跡を含む生活遺構が遺存している可能性が高い。

写真 31　第 1 トレンチ

写真 32　第 3 トレンチ発掘風景

写真 33　第 3 トレンチ　ピット

写真 34（右）第３トレンチ(南を望む)
写真 35（下）第３トレンチ南東隅

(VI) 間戸寺・寶壽坊

本山分末寺　西蓮山間戸寺（『仁安三年六郷二十八山本寺目録』による）は『豊後国六郷山諸勤行並諸堂役祭等目録寫』に初出する。これには、「間戸岩屋」と記され、本尊を薬師如来とし、法華不断経や薬師講、六所権現での二季祭五節供、祈祷を行っていたことが知られる。建武四年の『六郷山本中末寺次第並四至等注文案』には大折山末寺とあり、高山の末寺として記載されている。渡辺文雄氏によれば天文14年の「永正推定契約上状」などに「間戸寺秋吉駿河守」とある人物が散見され、少なくとも16世紀中頃までは命脈を保っていたことが推測できる。[注1] 江戸時代以降のある時期に廃寺となったものであろう。現在、その寺跡は定かではない。『田染村志』では、田染村大字真中字間戸二ツ岡一弐

第18図　間戸寺位置図（1 / 2500）

四四番地に比定しているが。ここは今、150～160坪ほどの平坦地を有する杉山の独立丘陵で、集落が展開する間戸台地からは一段小高くなった場所である。いまだ寺跡を窺わせるような遺物、遺構は知られていない。しかしながら、前述した法会や祈祷、六所権現の記事からみて、中世の間戸寺にはそれなりの数の僧や施設が存在していたと考えられるわけで、本地点や穴井戸観音、間戸二重塔が置かれていた場所を含めたかなり広い範囲を寺域としていたのであろう。その具体的な遺構については、今後の発掘調査に期したい。

ところで、間戸の台地に立ち北を望めば、目の前に朝日岩の奇山が連なり、一種名状しがたい情趣が漂っている。この奇山に向かって、台地をいったん谷筋まで降りて行き、再び長い石段を登りつめると、穴井戸観音と称されている洞窟にたどり着く。洞窟の前には2間×2.5間の小堂があり木造や石造の観音菩薩立像や像名不明の破損仏が安置されている。堂宇の前庭には灯篭や、石殿、五輪塔などが並ぶ。これらには宝暦9年（1759）、文化10年（1813）の年号銘があり近世の作であるが、本岩窟と間戸寺の六所権現との関連についても発掘調査による検証が必要と考える。

寶壽坊

本寺は、『仁安三年六郷二十八山本寺目録』に本山分末寺寶壽坊と記されており、その寺跡は不明である。『田染村志』には、「寶珠坊跡は田染村大字眞中字眞木に在り。亦満山本山分末寺の一つなり。養老年間の開創にして嘗て満山長講所傳乗寺の坊中なりき。今は唯地名に其の名を止むるのみ」と記載されている。今回の調査ではその推定地さえも確認できなかった。

ところで、豊後高田市大字小崎字池ノ内の水田周辺部の山裾に宝珠院と称す寺跡と石垣の民家跡がある。元禄二年の村絵図（小崎村）には堂と2軒の民家が描かれており、民家は太平洋戦争前まで存在した。宝珠院の木造如来像は廃寺の後、「原の御堂」に移された。この「原の御堂」は小堂宇で、大永7年（1527）銘のある木造釈迦如来座像や木造観音座像、版木等が安置されている。これも『田染村志』によれば、「龍護山寶珠院跡は田染村大字峯崎字池の内に在り。開山は隠渓和尚にして、本尊は観世音菩薩とす。（以下略）」と紹介されている。

当館六郷山遺構確認調査において使用している、『仁安三年六郷二十八山本寺目録』を基にした六郷山寺院主要分布図には、本山分末寺として「宝珠院」という記載があり、問題である。『田染村志』では明確に六郷山寺院の「寶壽坊」と「宝珠院」が区別されており、なにより「二十八山本寺目録」に「宝珠院」でなく「寶壽坊」と記されているからには、今後はこれを「寶壽坊」と改めたい。

註1　渡辺文雄「六郷山寺院」『豊後国田染荘の調査Ⅰ』大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館　報告書3集　1986

参考文献

西国東郡田染村役場　『田染村志』1932

写真 36　間戸の台地

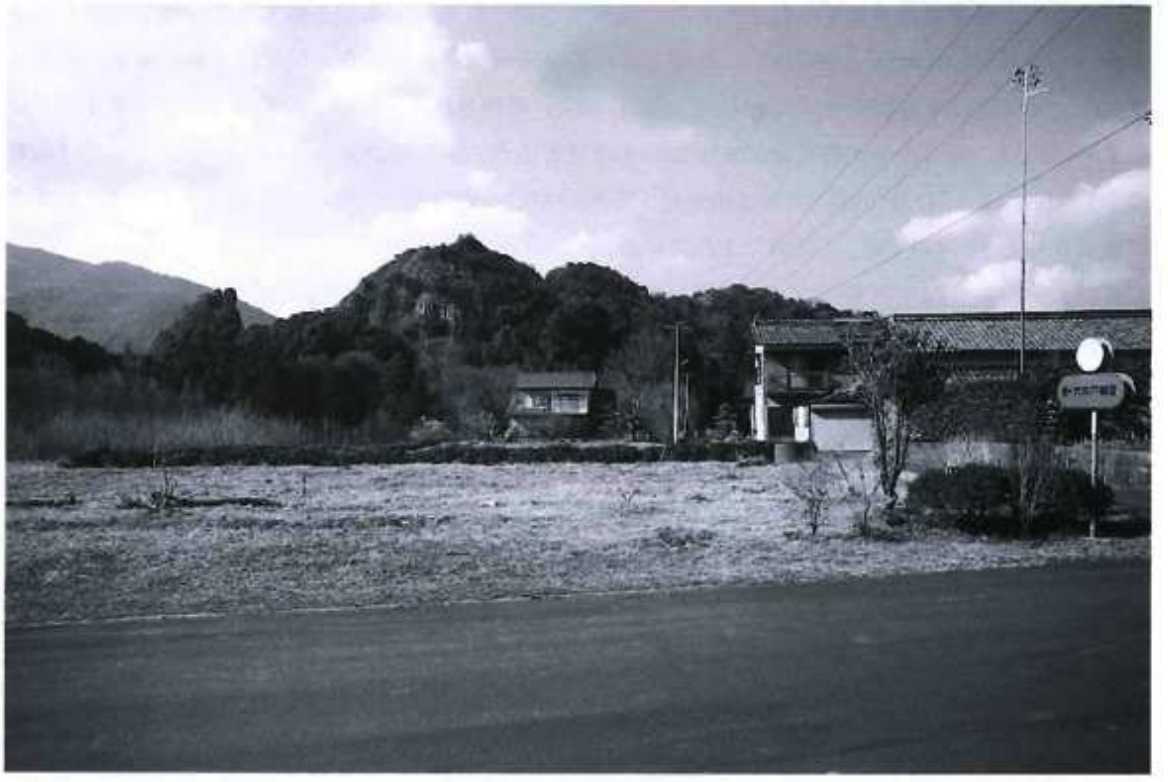


写真 37　間戸の朝日岩

写真 38
間戸二重塔

写真 39
集会所前に移された宝篋印塔

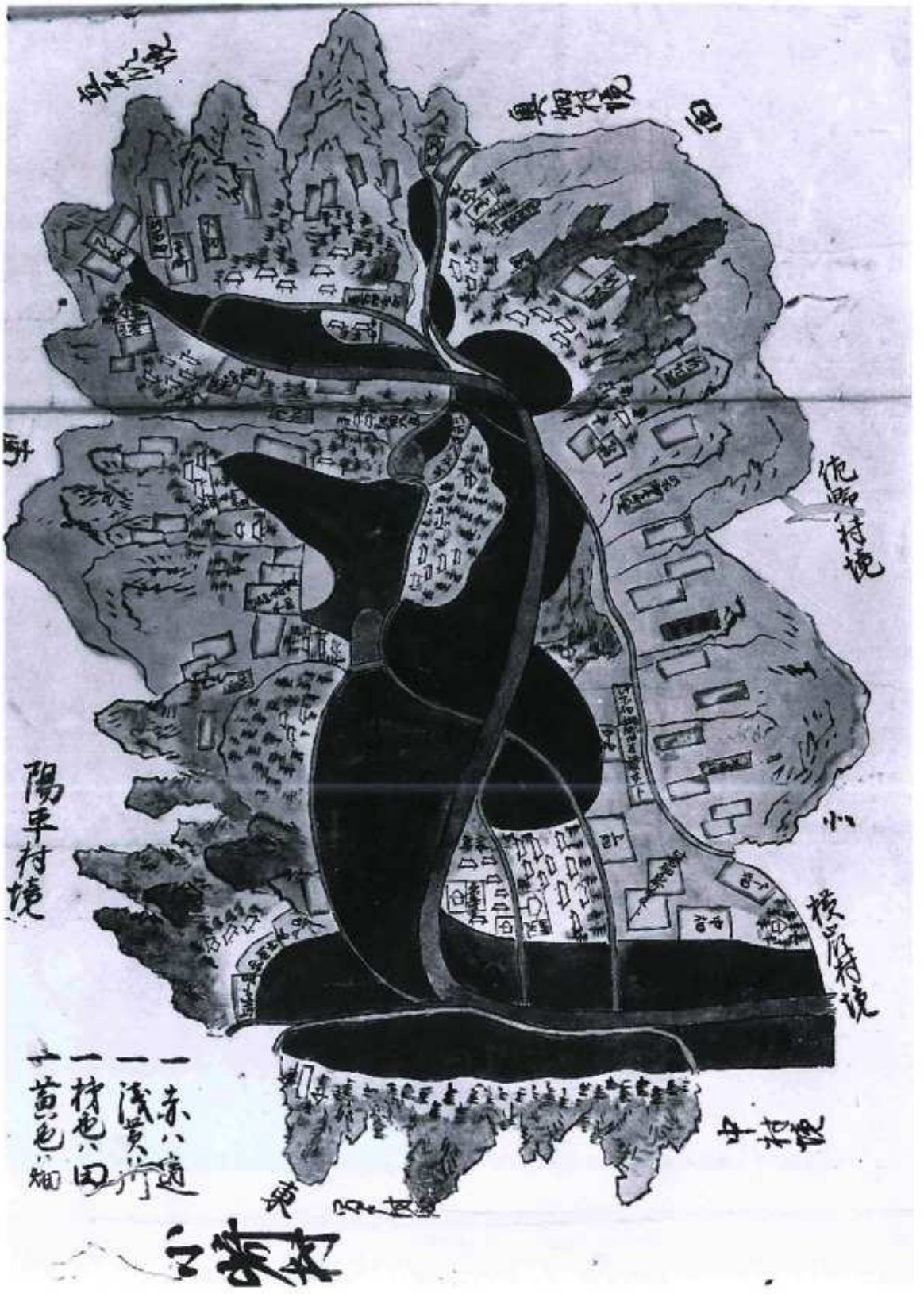


写真 40　元禄二年村絵図（小埼村）

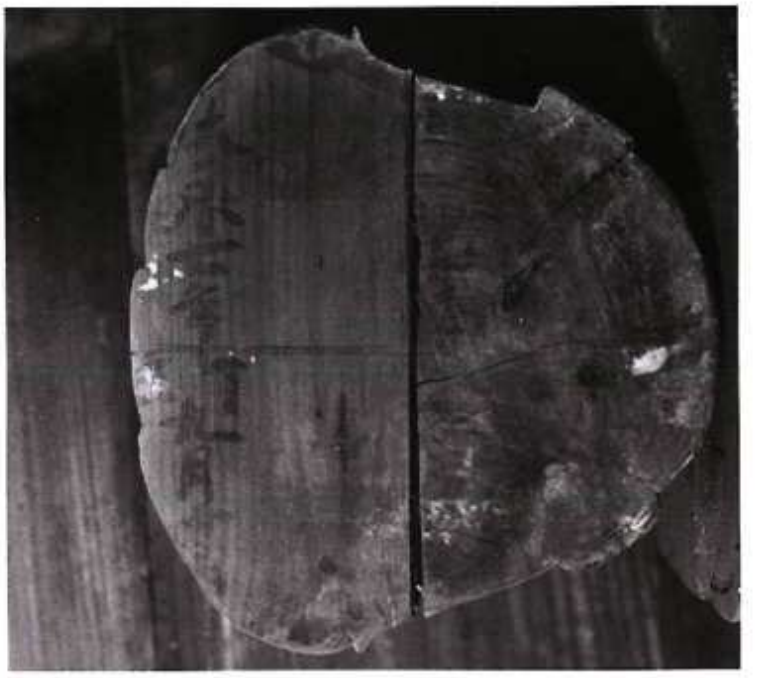


写真 41
原の御堂内の釈迦如来像（上）と銘文（下）

写真 42
穴井戸観音石段

写真 43
堂宇上方崖面にある伝説の鯛

写真 44
穴井戸観音前庭部の石塔

第3章　おわりに

今年度の六郷山寺院遺構確認調査は、吉祥寺、貴福寺、真覚寺、瑠璃光寺、妙覚寺、光明寺、寶壽坊、間戸寺の８ヶ寺を対象にした。うち、吉祥寺、瑠璃光寺以外は寺跡の確認さえままならず、成果の少ないものとなった。現地での聞き取り調査も、古来の伝承を継承している世代が急速に姿を消しつつあり、有力な情報を採取できなかった。表面観察と聞き取りをもとに遺構の現状実測を行ってきた当調査は、いわば六郷山寺院遺構の悉皆調査であるが、現状で残された諸遺構、伝承は古代から中世そのものではなく近世以降の変革を被っているものが多い。今回で言えば、吉祥寺、瑠璃光寺がそうである。

古い段階の六郷山寺院の形態は「本尊を安置する堂を中核として、その周辺ないしはもっと広範に山中に散在して坊や岩屋が存在して一種の修行場を形成し、全体として「○○山」とか「○○寺」などと呼ばれるものであった（渡辺文雄「六郷山寺院」『豊後国田染荘の調査Ⅱ』1986　55－56頁）」と推測されているように、いま我々が目にする建物、境内地と異なったものであろう。これまで、六郷山寺院をはじめとし、国東半島は中世以来の古い歴史と伝統が色濃く残存する地域という点が強調されてきたように思われる。もちろん、そうした視点に立脚する諸研究は国東半島に残る宗教行事や民俗行事、文化財や景観等の現状保存をもを視野にいれたすぐれて実践的な成果をあげてきたと言ってよい。しかしながら、古代・中世を変革しながら形成あるいは速成された時代としての近・現代の側に立った六郷山研究もまた必要ではないだろうか。以上の立場で、六郷山寺院の出現とその変遷の歴史的背景・意味を問うとき、仁聞伝説と、故老の伝承、近世作の『仁安三年六郷二十八山本寺目録』を含む諸古記録を基にした六郷山寺院遺構確認調査にはさらなる近世資料の活用と実証性のある発掘調査が不可欠となる。今年度においてはそうした観点からの調査が行き届かず、次年度に譲らざるを得ない。

大分県立歴史博物館報告第２集

六郷山寺院遺構確認調査報告書Ⅶ

平成11年3月31日

発　行　大分県立歴史博物館
〒872－0101　大分県宇佐市大字高森字京塚
印　刷　明治印刷株式会社
宇佐市大字長洲607